

「南鳥島文献リスト_小笠原自然文化研究所版 ver.20260505」の公開、
並びに情報提供のお願い、及び現地調査実施の提案

2026年5月5日 NPO法人 小笠原自然文化研究所

2026年4月21日、赤沢経済産業省大臣より小笠原村の渋谷村長に対して、南鳥島における文献調査(高レベル放射性廃棄物の最終処分場建設検討のための第1段階)に着手する方針が伝えられました。小笠原自然文化研究所では、2026年4月9日付けHP等に掲載の通り、同最終処分場建設の検討においては、開かれた意志決定プロセスの重要性と、知見の少ない南鳥島の情報を地域自ら収集する必要性を述べてまいりました。当研究所では、引き続き以下の要望を継続して参ります。

- 南鳥島に関する、民間独自の文献・情報収集を実施します。
- 引き続き、地域主体の現地調査の実現を提案・要望します。

〈南鳥島の文献及び情報をお持ちの皆様には、是非ご協力をお願いいたします〉

NPO法人 小笠原自然文化研究所

●南鳥島に関する民間独自の文献・情報収集を実施します

小笠原自然文化研究所では南鳥島に関連するさまざまな文献の収集を開始し、生物・自然環境の専門家や文献収集家等から多くの文献や情報の提供、紹介を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。

当研究所では、今後も南鳥島に関する自然環境等の文献収集を続けます。また、収集した文献により「南鳥島文献リスト_小笠原自然文化研究所版」を創設し、島民がアクセス可能な形で広く一般に情報を公開します。さらに小笠原村、経済産業省、原子力発電環境整備機構にも情報を提供する等、南鳥島の議論を深めるための努力を続けてまいります。研究者、専門家をはじめ、文献・情報をお持ちの方々は、「南鳥島文献リスト_小笠原自然文化研究所版」宛に、ぜひ、情報をお寄せ頂きたく、お願いいたします。また、本情報は幅広い拡散を希望します。みなさまのご協力をお願いいたします。

なお、本日は「南鳥島文献リスト_小笠原自然文化研究所版」の第1報として、2026年5月4日時点の情報(文献等のタイトル、情報へのアクセス方法及び所在)を公開します。

●地域主体の現地調査実現の提案・要望

南鳥島は、小笠原諸島においても、もともと情報の少ない島嶼のひとつです。しかしながら、これまでの収集文献から小笠原固有種ミズタマヤッコの発見地、トゲミウドノキの国内唯一の生息地、日本唯一のシロアジサシの繁殖地等の情報が得られました。情報が少ないながら、南

鳥島は十分に保全価値のある島嶼であるとともに、生物地理学の観点から、洋上に孤立した南鳥島は、多くの海洋生物にとって不可欠なステップストーンとなっている可能性があります。

当研究所では、小笠原諸島をかたちづくる重要なピースである南鳥島の自然環境が未解明のまま、高レベル核廃棄物の最終処分場等の建設や建設のための調査や実験等によって、価値を失う可能性を強く憂慮しています。

私たちは、小笠原諸島における数多くの無人島の自然環境調査及び、調査隊の組織運営の経験に基づき、これに小笠原研究者のネットワークを駆使して、南鳥島の自然環境の現況を把握するための現地調査の実施を提案いたします。

南鳥島文献リスト
小笠原自然文化研究所版 ver. 20260505

NPO 法人 小笠原自然文化研究所

1. 自然生態系に関する価値

当研究所が収集した南鳥島関連文献および資料から、南鳥島の注目すべき自然生態系の価値を書き出しました。この他にお気づきの事項がございましたら、小笠原自然文化研究所まで情報をお寄せください。ご協力お願い申し上げます。

E-mail: i-bo★ogasawara.or.jp (★を@に直して送信してください。)

○日本国内最古の火山—サンゴ礁地形

・海盆底はジュラ紀、火山体はジュラ紀または白亜紀に形成。火山体の沈降にともないサンゴ礁が上方へ成長し、環礁を経て最終段階の卓礁に至ったと推定されている。

・南鳥島は田山利三郎博士によって提唱された卓礁 (Table Reef) に分類される国内唯一の島。サンゴ礁地形はエプロン礁 (Apron Reef) ⇒裾礁 (Fringing Reef) ⇒堡礁 (Barrier Reef) ⇒環礁 (Atoll) ⇒卓礁へと至る。

○日本国内唯一の植物自生地

・国内唯一のトゲミウドノキ *Pisonia grandis* の自生地。南鳥島は本種の分布の北限にあたる。

○絶滅危惧種の甲殻類の生息地

- ・サキシマオカヤドカリ *Coenobita perlatus* の生息地
環境省レッドリスト 2020: VU
(東京都レッドデータブック (島しょ部) 2014: DD)

○小笠原諸島および周辺海域固有魚類の生息地

- ・ミズタマヤッコ *Genicanthus takeuchii* の生息地
小笠原諸島固有種
(環境省海洋生物レッドリスト 2017: DD)

ミズタマヤッコは 1987 年に南鳥島において初めて発見された。発見当時、複数地点から多くの個体が観察されており、本種の主生息地となっている可能性がある。本種は最近、北マリアナ諸島のファラリオン・デ・パハロス島の他、南鳥島の東南東 1400km に位置するウェーク島からも確認されており、南鳥島が本種の分布のステップ・ストーンとして機能している可能性が示唆される。

- ・ヤセタマカエルウオ *Alticus orientalis* の生息地
伊豆・小笠原諸島固有種

○太平洋プレート区特有の魚類相

・南鳥島は日本で唯一太平洋プレート上に存在する島で、太平洋プレート区という沿岸海洋生物地理区に属するため、国内では他に類を見ない生物相（サンゴ礁生物群集等）が成立している可能性がある。南鳥島で生息記録のある魚類は、調査事例に限られるため 37 種と少ないが、このうち 35%にあたる 13 種が太平洋プレート区に特異的に分布する種で占められている（クチボソボラ *Neomyxus leuciscus*、アライソハタ *Serranus socialis*、トンプソンチョウチョウウオ *Hemitaurichthys thompsoni*、サイハテユゴイ *Kuhlia sandvicensis*、メイキュウサザナミハギ *Ctenochaetus hawaiiensis* 等）。

○遺伝的に分化した爬虫類の生息地

- ・南鳥島固有のハプロタイプを有するオガサワラトカゲ *Cryptoblepharus nigropunctatus* 個体群の生息地

○絶滅危惧種の爬虫類の生息地

- ・ミナミトリシマヤモリ *Perochirus atele* の生息地（絶滅した可能性あり）
環境省レッドデータブック 2026: VU
（東京都レッドデータブック（島しょ部）2014: DD）

○日本国内唯一の海鳥繁殖地

- ・シロアジサシ *Gygis alba* の国内唯一の繁殖地
2022 年の調査で 120 年ぶりに繁殖が再確認された。国内での繁殖記録は南鳥島に限られる。

○絶滅危惧種の海鳥繁殖地

- ・コアホウドリ *Diomedea immutabilis* の繁殖地（絶滅した可能性あり）
環境省レッドリスト 2026: EN
東京都レッドデータブック（島しょ部）2014: EN
- ・アカオネツタイチョウ *Phaethon rubricauda* の繁殖地
環境省レッドリスト 2026: VU
東京都レッドデータブック（島しょ部）2014: VU
- ・アカアシカツオドリ *Sula sula* の巣材運び行動記録
環境省レッドリスト 2026: VU
東京都レッドデータブック（島しょ部）2014: VU

・ヒメクロアジサシ *Anous minutus* の繁殖地
東京都レッドデータブック（島しょ部）2014: EN

・シロアジサシ *Gygis alba* の繁殖地
東京都レッドデータブック（島しょ部）2014: EX
(2022年の調査で120年ぶりに繁殖が再確認されている。)

○海鳥の主要な繁殖地

・ヒメクロアジサシ *Anous minutus* の国内最大の繁殖地
2022年の調査では139巣が確認された。他の国内繁殖地は火山列島監獄岩（10巣）、宮古諸島フデ岩（1巣）に限られる。

・セグロアジサシ *Onychoprion fuscatus* の主要な繁殖地
2022年の調査では、約13500個体の繁殖集団が確認された。

○自然環境保護制度

・国指定鳥獣保護区（2009年11月1日～2029年10月31日）

2. 南鳥島文献リスト

当研究所が収集した自然環境に関する文献資料をリスト化しました。一部の文献は分野間で重複しています。⇒[Web 公開ページ](#)の記述のある文献は、クリックすると Web 上の公開ページが表示され、閲覧することができます。⇒[Web 公開ページ](#)の記述の無い文献についても小笠原自然文化研究所に所蔵していますので、閲覧ご希望の方はご連絡ください。また、このリストに掲載されていない文献や資料をご存知でしたら、ぜひ小笠原自然文化研究所まで情報をお寄せください。よろしくお願いたします。

E-mail: i-bo★ogasawara.or.jp（★を@に直して送信してください。）

○気象

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. ⇒[Web 公開ページ](#)（最終閲覧日: 2026年5月2日）

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

気象庁（編）（1963）南鳥島・鳥島の気象累年報および調査報告. 気象庁, 188p.

気象庁海洋気象部（1979）小笠原気象観測業務10年誌一再開10年を記念して一. 気象庁海洋気象部, 121p.

小笠原協会（編）（1997）東京都小笠原諸島 絶海の孤島 南鳥島・沖の鳥島～沿革と概要～. 小笠原 特集第42号, 26.

Ray RD, Merrifield, MA & Woodworth, PL (2023) Wave setup at the Minamitorishima tide gauge. *Journal of Oceanography* 79: 13-26.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. ⇒[Web 公開ページ](#)（最終閲覧日: 2026年5月2日）

鈴木 耕・小関 昭造 (1963) 南鳥島上層の風—気温の周期について—。南鳥島・鳥島の
気象累年報および調査報告。気象庁, 151-155.

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々。地理 37(7):
28-36.

○地形・地質・土壌

Aftabuzzaman, Md, Yomogida, K, Suzuki, S, Takayanagi, H, Ishigaki, A, Machida, S, Asahara,
Y, Yamamoto, K, Hirano, N, Sano, SI, Chiyonobu, S, Bassi, D & Iryu, Y. (2021) Multi-
approach characterization of shallow-water carbonates off Minamitorishima and their
depositional settings/history. *Island Arc* 2021; 30:e12400, DOI: 10.1111/lar.12400.

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop
Museum* 2(1): 77-126. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

海老名 卓三郎 (2015) 海洋地質学者・父・田山利三郎の足跡—パラオ共和国・南洋群島・
明神礁—。地図 53(2): 30-35. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

猪間 収三郎 (1904) 南鳥島。地学雑誌 16(11): 730-731. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日:
2026 年 5 月 3 日)

貝塚 爽平 (1996) 南鳥島と沖ノ鳥島 日本の東端と南端のサンゴ島。中村 和郎・氏家 宏・
池原 貞雄・田口 日出夫・堀 信行(編)『日本の自然 地域編 8 南の島々』岩波書店,
56-57.

金沢大学理学部附属低レベル放射能実験施設 (1981) ^{14}C 法による造礁生物化石の年代測
定(IV)。金沢大学附属低レベル放射能実験施設研究概要・年次報告 1980.4~1981.3, 13.
⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

茅根 創 (2004) 国境のサンゴ礁。環境省・日本サンゴ礁学会 (編)『日本のサンゴ礁』環境省,
22-23. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

Konishi, K, Tanaka, T. & Omura, A (1985) Radiocarbon ages of “exposed reef” at Minamitori-
shima (Marcus Island), central Pacific. *Proceedings of the Japan Academy. Series B,
Physical and biological sciences* 61: 284-287. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年
5 月 3 日)

三木 千紘・雨谷 純 (1990) II. 3 南鳥島局の概要。通信総合研究所季報 36(8): 51-59. ⇒
[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

長岡 信治 (1987) 南鳥島および沖ノ鳥島の地形と地質。小笠原研究年報 11: 88-95.

中陣 隆夫 (2015) 田山利三郎博士の海底地形・地質学研究の業績—「大洋底拡大説」に
果たした役割—。地図 53(2): 12-29. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4
日)

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land
animals. *Pacific Science* 15: 82-104. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

田山 利三郎 (1934) 我が南洋に於ける珊瑚礁の分布(豫報)。地理学評論 10(7): 587-605.
⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

田山 利三郎 (1952) 南洋群島のサンゴ礁。水路部報告 11. 海上保安廳水路部, 291p.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

東京大学・東京大学海洋アライアンス (2025) 沖ノ鳥島・南鳥島の地生態工学的維持のための研究調査(成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B II 実施機関 国立大学法人東京大学, 26p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 28 日)

東京大学・東京大学海洋アライアンス (2026) 沖ノ鳥島・南鳥島の地生態工学的維持のための研究調査(成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B II 実施機関 国立大学法人東京大学, 47p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 28 日)

Ueda, Y (1988) Geophysical study of two seamounts near Minami-Tori Sima (Marcus) Island, Western Pacific Ocean. *Journal of Geomagnetism and Geoelectricity* 40(12): 1481-1501.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. *地理* 37: 28-36.

吉田 弟彦 (1902) 南鳥島視察. *地質学雑誌* 14(166): 674-678. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

○藻類

Tsuda, RT (1968) Some marine benthic algae from Marcus Island, Bonin Islands. *Micronesica* 4(2): 207-212. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

○植物

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

長谷川 義人 (1986) 南鳥島産植物目録. *レポート日本の植物* 30: 100-101.

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. *週刊金曜日*, 3 月 3 日号, 19.

延島 冬生・小谷野 伸二 (1991) 南鳥島の植物とアフリカマイマイ. *緑の推進委員ムニン会資料*, 18p.

小笠原協会 (編)(1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯 (その二). 小笠原第 137 号, 4.

小笠原総合事務所国有林課 (2024) 南鳥島国有林の巡視. *センターTOPICS* 令和 6 年 2 月 29 日, 1p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

奥富 清・井関 智裕 (2004) 南鳥島 (マーカス島) の植生. *東京植生研究会*, 69p.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

津山 尚 (1938) 南鳥島産の植物. *植物研究雑誌* 14(6): 425-426. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

津山 尚 (1938) 南鳥島産の植物の補遺. *植物研究雑誌* 14(8): 554. [⇒Web 公開ページ](#)

(最終閲覧日: 2026年5月3日)

矢部 吉禎 (1902) 南鳥島産植物. 植物学雑誌 16: 258. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. 地理 37:28-36.

安田 正次 (2018) 衛星画像を用いた南鳥島の植生図の更新. 2018 年度日本地理学会春季学術大会要旨集. https://doi.org/10.14866/ajg.2018s.0_000189. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

吉原 重康 (1901) 小笠原島廳附屬未開の島嶼. 地質学雑誌 8(97): 436-443. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

○造礁サンゴ類

稲葉 慎 (2004) 小笠原諸島. 環境省・日本サンゴ礁学会 (編)『日本のサンゴ礁』環境省, 168-171. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. 週刊金曜日, 3月3日号, 19.

茅根 創 (2004) 国境のサンゴ礁. 環境省・日本サンゴ礁学会 (編)『日本のサンゴ礁』環境省, 22-23. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

東京大学・東京大学海洋アライアンス (2026) 沖ノ鳥島・南鳥島の地生態工学的維持のための研究調査(成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B II 実施機関 国立大学法人東京大学, 47p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月28日)

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. 地理 37:28-36.

○軟体動物

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

Fukuda, H (1993) Marine Gastropoda (Mollusca) of the Ogasawara (Bonin) Islands Part 1: Archaeogastropoda and Neotaenioglossa. *Ogasawara Research* 19: 1-85.

Fukuda, H (1994) Marine Gastropoda (Mollusca) of the Ogasawara (Bonin) Islands Part 2: Neogastropoda, Heterobranchia and fossil species. *Ogasawara Research* 20: 1-126.

Fukuda, H (1995) Marine Gastropoda (Mollusca) of the Ogasawara (Bonin) Islands Part 3: Additional Records. *Ogasawara Research* 21: 1-142.

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. 週刊金曜日, 3月3日号, 19.

波江 元志 (1905) 南鳥島産動物. 動物学雑誌 17: 223-226.

西村 和久 (1992) 小笠原諸島の貝IV南鳥島・沖の鳥島. *ちりぼたん* 22(4): 83-87.

西村 和久 (1999) 伊豆・小笠原諸島海域における貝類分布. 東京都水産試験場調査研究報告第 211 号, 東京都水産試験場, 124p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月)

月 3 日)

延島 冬生・小谷野 伸二 (1991) 南鳥島の植物とアフリカマイマイ. 緑の推進委員ムニン会資料, 18p.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. *地理* 37: 28-36.

○土壤動物

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

Uchida, H (1955) Apterygota of Marcus Island. *Bulletin of the Biogeographical Society of Japan* 16-19: 203-207.

○昆虫類

有本 誠・上地 俊久・井上 達也・久井 潤也・中原 重仁 (2025) 静岡県浜松市で発見された根絶されたアリモドキゾウムシ *Cylas formicarius* (甲虫目ミツギリゾウムシ科) の分子検討解析による侵入起源推定. *日本応用動物昆虫学会誌* 69(4): 131-140. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

井上 広光 (2022) 森本先生と二度の小笠原、そして南鳥島. ひこさんがら (九州大学農学部昆虫学研究室) 12: 80-83. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

Konishi, M (1955) Cossoninae of Marcus Island (Col., Curculionidae). *Insecta Matsumurana* 19(1-2): 64. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

森本 桂・石井 勝洋 (2000) 南鳥島のシロアリ調査とフィリピンイエシロアリの定着. しろあり (社団法人日本しろあり対策協会) 122: 9-17. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

延島 冬生・小谷野 伸二 (1991) 南鳥島の植物とアフリカマイマイ. 緑の推進委員ムニン会資料, 18p.

小笠原協会 (編) (1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯 (その二). 小笠原第 137 号, 4.

坂上 昭一 (1953) マーカス島に旅して. *新昆虫* 6(5): 23-29.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

Uchida, H (1955) Apterygota of Marcus Island. *Bulletin of the Biogeographical Society of Japan* 16-19: 203-207.

Yoshitake, H, Arimoto, M, Hinomoto, N, Lee, C-F, Lu, S-S, Yap, SA & Cabras, AA (2021) Genetic variation of two weevil pests of sweet potato, *Cylas formicarius* (Coleoptera: Brentidae) and *Euscepes postfasciatus* (Coleoptera: Curculionidae), in Japan based on mitochondrial DNA. *Applied Entomology and Zoology* 56: 483-496.

○甲殻類

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. 週刊金曜日, 3月3日号, 19.

倉田 洋二 (1987) オカヤドカリについての二, 三の知見. 東京都教育委員会 (編) 小笠原諸島オカヤドカリ生息状況調査報告. 東京都教育庁社会教育部文化課, 94-97.

波江 元志 (1905) 南鳥島産動物. 動物学雑誌 17: 223-226.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

武田 正倫 (2014) サキシマオカヤドカリ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 537. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月4日)

○魚類

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

Bryan, WA & Herre, AW (1903) Annotated list of the Marcus Island fishes. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 126-139. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

Gosline, WA (1955) The inshore fish fauna of Jonston Island, a central Pacific atoll. *Pacific Science* 9: 442-480. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

Greene, BD (2024) 1st Record of *Genicanthus takeuchii* Pyle, 1997 from Wake Atoll. 360ft (110m). ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月29日)

石丸 淳・古橋 龍星・本村 浩之 (2024) 日本産マーカスミノカエルウオの追加記録ならびに国内における本種の分布状況. *Ichthy* 48: 47-54. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

海洋研究開発機構 (2023) 沖ノ鳥島・南鳥島周辺海域における好適漁場推定モデルを活用した漁場管理情報の創出 (令和4年度 成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B 実施機関 国立研究開発法人海洋研究開発機構, 24p. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月28日)

海洋研究開発機構 (2024) 沖ノ鳥島・南鳥島周辺海域における好適漁場推定モデルを活

- 用した漁場管理情報の創出（令和5年度 成果報告書）．東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B 実施機関 国立研究開発法人海洋研究開発機構，26p. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年4月28日）
- 海洋研究開発機構（2025）沖ノ鳥島・南鳥島周辺海域における好適漁場推定モデルを活用した漁場管理情報の創出（令和6年度 成果報告書）．東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B 実施機関 国立研究開発法人海洋研究開発機構，27p. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年4月28日）
- Myers, RF, Burdick, DR, Mundy BC, Lindfield, SJ, Tibbatts, B & Donaldson, TJ (2025) New and recent records of fishes from the Mariana Islands, western Pacific Ocean. *Journal of the Ocean Society Foundation* 42: 15-90. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年5月5日）
- 中坊 徹次（編）（2013）『日本産魚類検索全種の同定，第三版』東海大学出版会，2530p.
- 中村 潤平・本村 浩之（2025）日本におけるヒレナガハタの分布記録の再検討. *Ichthy* 58: 72-75. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年5月3日）
- Nakayama N & Endo H (2017) A new species of the grenadier genus *Coryphaenoides* (Actinopterygii: Gradiformes: Macrouridae) from Japan and a range extension of *Coryphaenoides rudis* Günther 1878 in the northwestern Pacific. *Ichthyological Research* 64: 1-12.
- 波江 元志（1905）南鳥島産動物. 動物学雑誌 17: 223-226.
- 西山 肇・渡井 幹雄・瀬能 宏・本村 浩之（2012）鹿児島県与論島から採集されたスズメダイ科魚類 *Stegastes insularis* ヨロンスズメダイ（新称）とその分布特性. 魚類学雑誌 59(2): 155-162. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年5月3日）
- 小埜田 明（2012?）漁業調査指導船「みやこ」の長期航海（南鳥島から沖ノ鳥島周辺海域調査について）．東京都島しょ農林水産総合センター調査・研究 平成24年度主要成果集. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年4月21日）
- 小笠原協会（編）（1997）南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯（その二）．小笠原第137号, 4.
- Ogata, Y, Kishi, T, Kishi, Y & Murase, A. (2024) Northernmost record of *Cirripectes quagga* (Actinopterygii: Blenniidae) from Kadogawa Bay, northern Miyazaki Prefecture, southern Japan. *Biogeography* 26: 34-38. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年5月3日）
- 岡本 誠（2019）南鳥島北東方海域から得られたヤセムツ科魚類 *Epegonus fragilis* イブシギンヤセムツ（新称）. 魚類学雑誌 66(1): 79-86. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年5月3日）
- 岡本 誠・瀬能 宏・山崎 哲也（2020）イブシギンヤセムツ *Epigenus fragilis*（ヤセムツ科）の日本から二例目の記録と形態学的・生態学的知見. 神奈川県立博物館研究報告（自然科学）49: 1-6. [⇒Web 公開ページ](#)（最終閲覧日：2026年5月3日）
- Pyle, RL 1997. A new angelfish of the genus *Genicanthus* (Perciformes: Pomacanthidae) from the Ogasawara Islands and Minami Tori Shima (Marcus Island). *Rvue française Aquariologie* 24(3-4): 87-92.
- Randall, JE, Ida, H, Kato, K., Pyle, RL & Earle, JL (1997) Annotated checklist of the inshore

- fishes of the Ogasawara Islands. *National Science Museum Monographs* 11: 1-74.
- Randall, JE & Randall, HA (2001) Review of the Fishes of the Genus *Kuhlia* (Perciformes: Kuhlidae) of the Central Pacific. *Pacific Science* 55(3): 227-256.
- 笹木 大地・阿部 公哉・小枝 圭太・木村 清志 (2025) 日本国内の海洋島におけるユゴイ科魚類 *Kuhlia sandvicensis* サイハテユゴイ (新称) の記録. *魚類学雑誌* 72(2): 243-249.
- Springer, VG (1982) *Pacific Plate biogeography, with special reference to shorefishes*. Smithsonian Institution Press, 182p. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)
- 斉藤 洪成・村瀬 敦宣 (2024) 東京大学総合研究博物館所蔵標本に基づく南鳥島からのヤセタマカエルウオの記録. *Ichthy* 46: 31-33. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)
- 瀬能 宏 (2004) 小笠原の魚類. 『東洋のガラパゴス 小笠原一固有生物の魅力とその危機—』神奈川県立生命の星・地球博物館, 55-62.
- 武内 宏司 (1987) 南鳥島にヤッコの新種発見!! . 季刊トロピカル・マリン・アクアリウム 18: 3-6.
- 田中 翔大・斉藤 洪成・瀬能 宏 (2021) 小笠原諸島父島から採集されたクチボソボラ *Neomyxus leuciscus* 稚魚とその生物地理学的考察. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学) 50: 39-45. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)
- 東京都島しょ農林水産総合センター (2008) 調査船「みやこ」本土最東端「南鳥島」へー1. 大島事業所トピック No. 324. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月21日)
- 東京都島しょ農林水産総合センター (2008?) 日本最東端の島の有用魚類を調査する～南鳥島(マーカス)周辺での漁業資源調査～. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月21日)
- 吉田 朋弘・本村 浩之 (2014) 屋久島から得られたハタ科魚類ヤマトトゲメギス *Aporops bilinearis* の分類学的再検討. *Nature of Kagoshima* 40: 35-41. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)
- 吉原 重康 (1901) 小笠原島廳附屬未開の島嶼. *地質学雑誌* 8(97): 436-443. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

○爬虫類

- Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)
- 長谷川 雅美 (2014) ミナミトリシマヤモリ. 東京都環境局自然環境部(編) レッドデータブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種(島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 350. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月4日)
- 長谷川 雅美 (2014) オガサワラトカゲ. 東京都環境局自然環境部(編) レッドデータブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種(島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 350-351. ⇒[Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月4日)
- Hayashi, F, Shima, A, Horikoshi, K, Kawakami, K, Segawa, RD, Aotsuka, T & Suzuki, T (2009)

Limited overwater dispersal and genetic differentiation of the Snake-eyed Skink (*Cryptoblepharus nigropunctatus*) in the Oceanic Ogasawara Islands, Japan. *Zoological Science* 26: 543-549.

堀越 和夫 (2008) 南硫黄島のトカゲ類. 小笠原研究 33: 129-134.

星野 一三雄 (2005) 南鳥島からのオガサワラヤモリ *Lepidodactylus lugubris* (爬虫綱: 有鱗目) の新記録. 爬虫両棲学会報 2005(2): 107-109. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

川上 和人・村上 勇樹 (2018) 2017年における南硫黄島の爬虫類相. 小笠原研究 44: 289-294. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月4日)

波江 元志 (1905) 南鳥島産動物. 動物学雑誌 17: 223-226.

小笠原協会 (編) (1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯 (その二). 小笠原第 137号, 4.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

千石 正一 (1983) 南硫黄島の爬虫類. 環境庁自然保護局 (編) 南硫黄島の自然 南硫黄島原生自然環境保全地域調査報告書. 財団法人日本野生生物研究センター, 287-301.

戸田 守 (2026) ミナミトリシマヤモリ. 環境省 (編) 第5次レッドデータブック: 絶滅のおそれのある日本の野生生物 爬虫類・両生類. 環境省, 152-156.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

吉原 重康 (1901) 小笠原島廳附屬未開の島嶼. 地質学雑誌 8(97): 436-443.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

○鳥類

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

平岡 昭利 (2003) 南鳥島の領有と経営—アホウドリから鳥糞, リン鉱採取へ—. 歴史地理学 45(4):1-14. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

平岡 昭利 (2008) アホウドリと「帝国」日本の拡大. 地理空間 1(1):53-70.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

河原 恭一 (1993) 南鳥島における鳥類の観察記録. *Strix* 12: 243-247. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. 週刊金曜日, 3月3日号, 19.

川上 和人 (2014) アカオネツタイチョウ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (鳥しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 328. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月4日)

川上 和人 (2014) コアホウドリ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (鳥しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 329. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月4日)

- 川上 和人 (2014) オオグンカンドリ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブックブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 332. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 川上 和人 (2014) アカアシカツオドリ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブックブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 333. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 川上 和人 (2014) ヒメクロアジサシ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブックブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 334. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 川上 和人 (2014) シロアジサシ. 東京都環境局自然環境部 (編) レッドデータブックブック東京 2014～東京都の保護上重要な野生生物種 (島しょ部) 解説板～. 東京都環境局自然環境部, 334. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 川上 和人 (2017) 小笠原諸島南鳥島の鳥類相. *Strix* 33: 131-143.
- 川上 和人 (2019) 小笠原諸島における攪乱の歴史と外来生物が鳥類に与える影響. 日本鳥学会誌 68(2): 237-262. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)
- 川上 和人 (2026) アカオネツタイチョウ. 環境省 (編) 第 5 次レッドデータブック: 絶滅のおそれのある日本の野生生物 鳥類. 環境省, 507-511. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 川上 和人 (2026) アカアシカツオドリ. 環境省 (編) 第 5 次レッドデータブック: 絶滅のおそれのある日本の野生生物 鳥類. 環境省, 539-543. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 川上 和人・鈴木 啓容・原田 幸典 (2024) 小笠原諸島南鳥島における海鳥相の変化. 日本鳥学会誌 73(2): 195-206. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)
- 小林 さやか・加藤 克 (2022) 明治期の南鳥島産鳥類標本の情報復元. 山階鳥学誌 54: 103-139. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)
- Kuroda, N (1954) Report on the trip to Marcus Island with notes on the birds. *Pacific Science* 8: 84-93. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)
- 波江 元志 (1905) 南鳥島産動物. 動物学雑誌 17: 223-226.
- 小笠原協会 (編) (1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯 (その二). 小笠原第 137 号, 4.
- 奥山 正樹 (2024) 国指定鳥獣保護区の指定区分別の現状と傾向. 野生生物と社会 12: 21-40. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)
- Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)
- 富田 直樹 (2026) コアホウドリ. 環境省 (編) 第 5 次レッドデータブック: 絶滅のおそれのある日本の野生生物 鳥類. 環境省, 241-245. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 4 日)
- 吉原 重康 (1901) 小笠原島廳附属未開の島嶼. 地質学雑誌 8(97): 436-443. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

○哺乳類

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. 週刊金曜日, 3月3日号, 19.

小笠原協会 (編) (1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯 (その二). 小笠原第 137号, 4.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. 地理 37: 28-36.

○自然環境総説

Bryan, WA (1903) A monograph of Marcus Island. *Occasional Papers of Bernice P. Bishop Museum* 2(1): 77-126. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

波江 元志 (1905) 南鳥島産動物. 動物学雑誌 17: 223-226.

Sakagami, SF (1961) An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. *Pacific Science* 15: 82-104. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

吉原 重康 (1901) 小笠原島廳附屬未開の島嶼. 地質学雑誌 8(97): 436-443.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

○自然環境保護制度

環境省 (2011) 海洋生物多様性保全戦略. 43p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月27日)

環境省関東地方環境事務所 (2011) 国指定南鳥島鳥獣保護区保護管理マスタープラン. 環境省関東地方環境事務所, 5p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

小笠原総合事務所国有林課 (2024) 南鳥島国有林の巡視. センターTOPICS 令和6年2月29日, 1p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

奥山 正樹 (2024) 国指定鳥獣保護区の指定区分別の現状と傾向. 野生生物と社会 12: 21-40. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

○歴史

平岡 昭利 (2003) 南鳥島の領有と経営—アホウドリから鳥糞, リン鉱採取へ—. 歴史地理学 45(4):1-14. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月2日)

平岡 昭利 (2008) アホウドリと「帝国」日本の拡大. 地理空間 1(1):53-70.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

Ikagawa, T. (1986) Marcus Island. 41p.

気象庁 (編) (1963) 南鳥島・鳥島の気象累年報および調査報告. 気象庁, 188p.

小笠原協会 (編) (1997) 東京都小笠原諸島 絶海の孤島 南鳥島・沖の鳥島～沿革と概要～. 小笠原 特集第42号, 26.

小笠原協会(編)(1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯(その二). 小笠原第 137 号, 4.

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. 地理 37:28-36.

○産業・生活・基盤整備

土生 昶毅 (2001) 火山列島および南鳥島のミカンコミバエ侵入警戒調査. 植物防疫 55(4): 40-42. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

平岡 昭利 (2003) 南鳥島の領有と経営—アホウドリから鳥糞, リン鉱採取へ—. 歴史地理学 45(4):1-14. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 2 日)

平岡 昭利 (2008) アホウドリと「帝国」日本の拡大. 地理空間 1(1):53-70.
[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 5 月 3 日)

河原 恭一 (1995) 日本列島環境破壊 南鳥島からの報告 自然は破壊されゴミは野積される. 週刊金曜日, 3 月 3 日号, 19.

海洋研究開発機構 (2023) 沖ノ鳥島・南鳥島周辺海域における好適漁場推定モデルを活用した漁場管理情報の創出(令和 4 年度 成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B 実施機関 国立研究開発法人海洋研究開発機構, 24p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 28 日)

海洋研究開発機構 (2024) 沖ノ鳥島・南鳥島周辺海域における好適漁場推定モデルを活用した漁場管理情報の創出(令和 5 年度 成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B 実施機関 国立研究開発法人海洋研究開発機構, 26p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 28 日)

海洋研究開発機構 (2025) 沖ノ鳥島・南鳥島周辺海域における好適漁場推定モデルを活用した漁場管理情報の創出(令和 6 年度 成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B 実施機関 国立研究開発法人海洋研究開発機構, 27p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 28 日)

気象庁(編) (1963) 南鳥島・鳥島の気象累年報および調査報告. 気象庁, 188p.

国土交通省関東地方整備局 (2015) 南鳥島における活動拠点整備事業. 関東地方整備局 事業評価監視委員会資料. 31p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 27 日)

小笠原協会(編) (1997) 東京都小笠原諸島 絶海の孤島 南鳥島・沖の鳥島～沿革と概要～. 小笠原 特集第 42 号, 26.

小笠原協会(編) (1997) 南鳥島の歴史 日本国領有までの経緯(その二). 小笠原第 137 号, 4.

小埜田 明 (2012?) 漁業調査指導船「みやこ」の長期航海(南鳥島から沖ノ鳥島周辺海域調査について). 東京都島しょ農林水産総合センター調査・研究 平成 24 年度主要成果集. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 21 日)

東京大学・東京大学海洋アライアンス (2025) 沖ノ鳥島・南鳥島の地生態工学的維持のための研究調査(成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 B II 実施機関 国立大学法人東京大学, 26p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026 年 4 月 28 日)

東京大学・東京大学海洋アライアンス (2026) 沖ノ鳥島・南鳥島の地生態工学的維持のための研究調査(成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 BⅡ実施機関 国立大学法人東京大学, 47p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月28日)

東京都島しょ農林水産総合センター (2008) 調査船「みやこ」本土最東端「南鳥島」へー1. 大島事業所トピック No.324. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日:2026年4月21日)

東京都島しょ農林水産総合センター (2008?) 日本最東端の島の有用魚類を調査する～南鳥島(マークス)周辺での漁業資源調査～. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日:2026年4月21日)

八木 浩司・牧田 肇・木庭 元晴 (1992) 日本の最東端 南鳥島で働く人々. 地理 37:28-36.

○紀行文・滞在記・ガイド

加藤 庸二 (2012) 南鳥島. 『原色ニッポン〈南の島〉大図鑑 小笠原から波照間まで 114の“楽園”へ』CEメディアハウス, 20.

小笠原ビー・アイ・オー (発行年不明) 小笠原諸島の島々 その2 南鳥島. 小笠原の歩き方 TIPS FOR VISITORS 72.

天外 生 (1902) 南鳥島航海日記. 14(10): 683-690. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

米内 金治 (1996) 『鳥を釣った話—父島・南鳥島気象観測所長の思い出』翰林書房, 132p.

吉原 重康 (1901) 小笠原島廳附屬未開の島嶼. 地質学雑誌 8(97): 436-443.

[⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年5月3日)

○文献レビュー

東京大学・東京大学海洋アライアンス (2023) 沖ノ鳥島・南鳥島の科学情報の収集・整理に基づく島の地生態工学的維持(成果報告書). 東京都 沖ノ鳥島・南鳥島に関する研究調査事業 実施類型 C 実施機関 国立大学法人東京大学, 21p+別添試料 14p. [⇒Web 公開ページ](#) (最終閲覧日: 2026年4月27日)